

もくじ

千住の近代俳句と富雪庵壽玉 - 河原町稲荷神社 檜樹奉献之碑より - P1
足立区域最後の代官 佐々井半十郎の明治維新 -「小西家文書の紹介」- P3

足立史談

第682号

2024年12月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集部

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

【図一】 河原町稲荷神社 檜樹奉献之碑



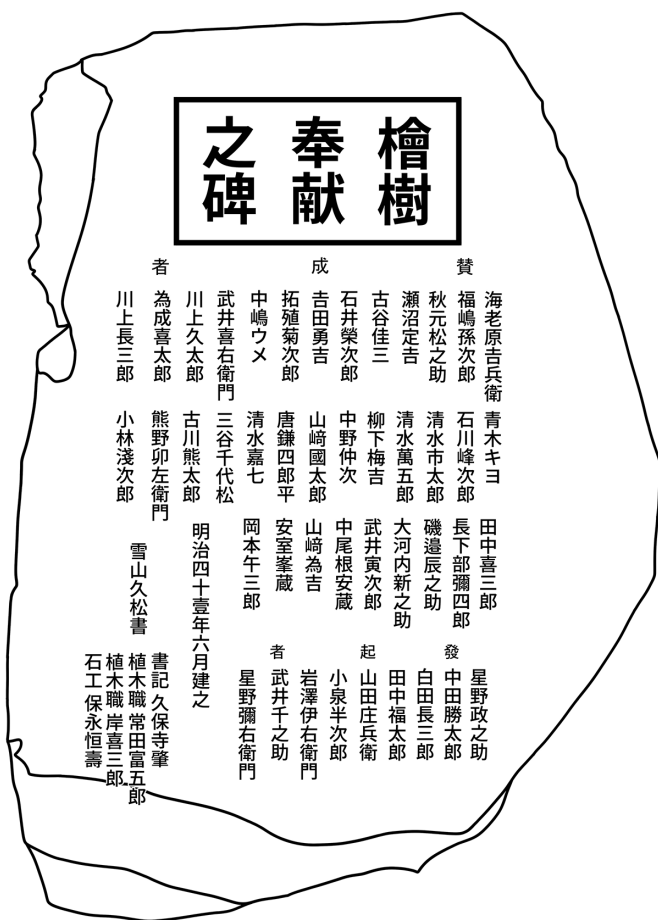
江戸時代後期より、千住では俳諧が盛んに行われてきました。松尾芭蕉の俳諧を理想としていた、千住関屋の里を拠点とし

千住の近代俳句と富雪庵壽玉 河原町稲荷神社 檜樹奉献之碑より

ふせつあんじゅぎよく
かいじゅほうけんのひ

加藤 ゆずか

【図二】 檜樹奉献之碑 碑陽翻字



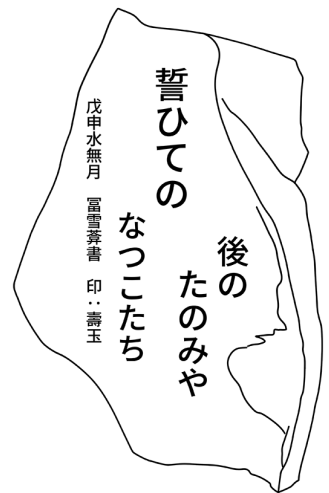
河原町稲荷神社 檜樹奉献之碑

た絵師・俳人の建部巢光（たけべそうちょう）が千住の名士たちを中心とした千住連を築き、千住連の人々は蕉風俳諧（しょうふうはいかい）を楽しむと同様に、他の地域の俳人と交流しました。

更に、江戸時代から明治時代へと変わり、近代においても、千住のまちの人々は蕉風の俳句を嗜んでいました。今回は、千住河原町稲荷神社に建立された檜樹奉献之碑【図一】を紹介し、この碑に句を寄せた近代千住の蕉風俳人、富雪庵壽玉の姿に迫ります。

檜樹奉献之碑は、河原町稲荷神社の東側の鳥居の傍に位置しています。碑の表は、上部に「檜樹奉献之碑」と題字が確認でき、その下には賛成者として三十五名、発起者として九名の名前が刻まれ、そして左下に建立年代を示す「明治四十壹年六月建之」と、建立に携わった人物、碑の表の文字を書いた書家の名前が刻まれています。賛成者や発起者は、詳細不明な人物もいるものの、その多くは千住中組（千住仲町・千住河原町・千住橋戸町）の間屋の人々であることがわかります。

【図二】



【図三】 檜樹奉献之碑
碑陰翻字



【図四】 晋雪庵柳崕 編 老鼠堂永機 校
『明治新撰俳諧百人一首』
明治33年(1900)刊、個人蔵

碑の裏には「誓ひての 後のたのみや なつこたち(夏木立)」の句が刻まれ、「戊申水無月 富雪庵書」という署名と「壽玉」と書かれた印がみえます【図三】。

以上より、この碑は明治四十一年六月に、千住中組を中心とした地域の人々が、河原町稲荷に檜樹を奉納したことを記念して建立されたもので、夏に茂る木立をさす「夏木立」という言葉で結んだ句も、この出来事を詠ったものであることがわかります。檜樹を奉納した経緯は不明ですが、句中に「後のたのみ(後の頼み)」という言葉があることなどから、河原町稲荷の将来を見据えた深い信仰の元で檜樹を奉納した様子が窺えます。

■千住を拠点とした近代蕉風俳人 富雪庵壽玉

檜樹奉献之碑に句を寄せた「壽玉」という号を持つ俳人「富雪庵」について、実はこの人物は、これから紹介する資料により、その詳細が

明らかとなります。

明治三十三年(一九〇〇)、蕉門十哲の一人、宝井其角の系統を引く其角堂永機の門人、晋雪庵柳崕(しんせつあんりゅうが)が編纂した俳書『明治新撰俳諧百人一首』が刊行されました。本書は天覧の栄誉を受け、これをきっかけとして晋雪庵柳崕は門下生を増やし、蕉風俳句の一大勢力を築くこととなります。

本書は、安政五年(一八五八)に刊行された『狂歌百人一首』中の初代歌川広重による百歌人の絵に、柳崕が選出した百人の蕉風俳人の句をのせてあらわしたもので、この中に、「富雪庵壽玉」の名を確認することができます【図四】。ここでは「露の戸や 答つ母の 老を泣」という壽玉の句と共に、「武蔵千住 上村昭元」と、壽玉の本名と所在地が示されています。

富雪庵壽玉の本名「上村昭元」は、

今度は明治二十七年(一八九四)刊の、東京都内の様々な産業を担う人物を一覧化した『東京諸営業員録 一名・買物手引』(国立国会図書館デジタルコレクションより、二〇二四年十一月十一日現在)に見出すことが出来ます。本書中の「書画 詩文歌 俳諧家 列挙(いろは順)」という項目に、「俳諧家 富雪庵 壽玉 上村昭元 千住中組七十」との記載があり、これにより、壽玉のより具体的な住所が判明します。

この住所を、明治四十四年(一九一一年)の地図「東京府南足立郡千住町 北豊嶋郡南千住町」や、「追捕旧日光道中千住宿家並変遷図」(東京都足立区教育委員会、平成四年・一九九二)と照合すると、壽玉は、現在の足立区千住仲町十二番十号に

おいて、小間物屋「田島屋」を営んでいた人物であったことがわかります。

つまり、上村昭元こと富雪庵壽玉は、江戸時代の千住連の人々と同様に、千住で商家を営みながら蕉風の俳人として明治時代に活動した人物であると位置づけることが出来るのです。

富雪庵壽玉には、千住において門人がいたこともわかっています。昭和十年(一九三五)に刊行された、様々な趣味を持つ人物を取り上げた書籍『趣味大観』に、千住河原町の青物問屋西川屋の当主、山田庄兵衛が、青年時代に壽玉から俳句を学んだという旨が記されています。

富雪庵壽玉が句を寄せた檜樹奉献之碑の存在に加え、地域の人が壽玉に俳諧の教えを求めたという記述は、明治期の千住で引き続き、蕉風の俳句文芸が地域の名士たちに受け入れられていた様子を物語っています。

■千住の近代俳句と足立の文化

江戸時代の千住連が江戸の絵師・漢詩人ら文人と密接に関わったように、富雪庵壽玉は明治時代以降に俳句を嗜んでいた人々も、当時の画家や書家、歌人など、様々な文化人と交流があった可能性が考えられます。

近代における千住をはじめとした足立の俳文学の展開は、地域の近代における美術文芸の様相を紐解く重要なテーマと言えるでしょう。郷土博物館では今後も調査研究を行っていきます。

足立区域最後の代官 佐々井半十郎の明治維新「小西家文書」の紹介

山田 拓実

「代官」と聞くと、「悪代官と越後屋」といった時代劇のイメージを思い浮かべる方も多いかと思われる。しかし、江戸幕府において代官というのは、幕府の直轄地を將軍の代わりに支配する重要な役職であり、旗本のなかでも民政に長けた有能な人物が抜擢されました。なかには陸奥藩代官（現福島県塙町）を勤めた寺西封元（てらにしのかもと）など、名代官として領民から慕われた人物もいました。

現在の足立区の一部（伊興など東叡山寛永寺の支配領域を除く）も江戸時代を通じて幕府領で、代官による支配が行われていました。そして、同地域を幕末期に治めた最後の代官こそが佐々井半十郎久保です。半十郎についてはこれまで、あさくらゆう氏が、『足立史談』で取り上げておられ、代官としての半十郎の動向は詳細に明らかにされています。しかし、同人の幕府崩壊後の動向に関しては検討されることがありませんでした。

「代官」と聞くと、「悪代官と越後屋」といった時代劇のイメージを思い浮かべる方も多いかと思われる。しかし、江戸幕府において代官というのは、幕府の直轄地を將軍の代わりに支配する重要な役職であり、旗本のなかでも民政に長けた有能な人物が抜擢されました。なかには陸奥藩代官（現福島県塙町）を勤めた寺西封元（てらにしのかもと）など、名代官として領民から慕われた人物もいました。

足立区立郷土博物館所蔵の「小西家文書」には、近世後期から近代にかけての佐々井家の文書が残されています。今回は「小西家文書」の史料紹介を兼ねて、幕府における佐々井半十郎の来歴を簡単に整理し、こうした幕臣としての動きが、明治期の半十郎の商法へどのように影響したのかについて検討してみたいと思います。

■代官佐々井半十郎

佐々井半十郎は幕府で鳥見頭をつとめた高倉庄九郎の次男として、文化十一年（一八一四）に生まれました。文政十二年（一八二九）に小普請組の佐々井久通の養子となり、天保元年（一八三〇）に家督を継ぐと、同七年に納戸へ就任します。そして嘉永三年（一八五〇）に備中倉敷代

官へ就任すると、ここから代官を歴任し、安政四年（一八五七）に甲州市川代官、そして文久元年（一八六一）に関東代官へ就任し、武蔵・下総国のうち現在の足立区の領域を含む十万余りの領域を支配するようになりました。

■幕府の崩壊と静岡藩

慶応三年（一八六七）十月に、將軍徳川慶喜が大政奉還を行い、江戸幕府が終焉しました。そして、翌月には王政復古の大号令が出されて、新政府が発足します。さらに、翌四年（九月に明治へ改元）一月の鳥羽伏見の戦いで旧幕府軍が敗れ、三月には江戸城の無血開城が行われ、江戸が新政府の手に渡りました。

ただし、地方支配という側面で見ると、これによってすぐに新政府の支配体制に移行したわけではなく、しばらくは旧幕府代官による支配が続きました。

しかし、同年七月になると、いよいよ足立区の一部は、武蔵県へ編入されることになり、代官佐々井半十郎の支配も終焉を迎えました。

小西家文書には、この時に支配所であった葛飾郡西葛西領（現在の葛飾区の一部）の村々から半十郎に長年の「御厚恩」を謝して送った礼状が残されています（小西家文書四二）。

こうして佐々井半十郎は幕府の旗本・代官としての地位を喪失しました。では、半十郎はこのあとどうな

ったのでしょうか。

徳川家が朝廷から赦免され、田安徳川家達を藩主として、慶応四年八月に静岡藩を立藩すると、多くの幕臣が静岡へ移住しました。

半十郎も例外ではなく、静岡へ移住しました。静岡藩内において半十郎はどのような役職に就任したのかといえば、やはり「勸農掛」という地方支配の役職に就任しました（『久能山叢書』）。小西家文書には、半十郎の勸農掛としての活動が見える史料もあります。例えば、「奉差上茶種勘定調書」（小西家12）は、勸農掛が静岡下魚町亀屋仁兵衛から茶種三九七俵を仕入れた際の領収書で、同掛が茶の品種改良など、静岡の茶生産に注力していた様子がうかがえます。

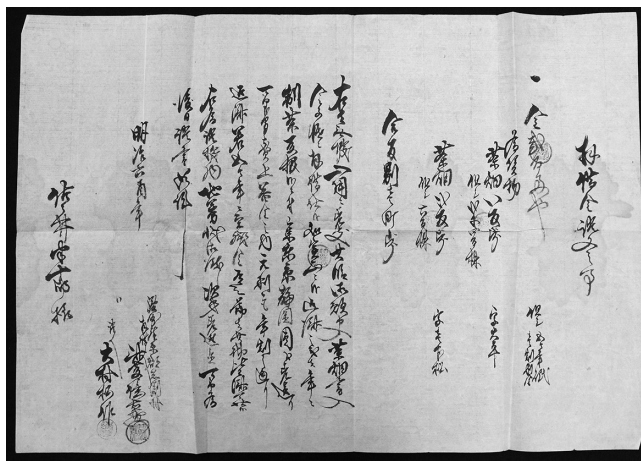
■廃藩置県後の佐々井半十郎

明治四年（一八七一）七月、廃藩置県が断行されました。これに伴い、静岡藩も廃藩になり、静岡県が設置され、半十郎は藩士としての立場を失いました。では、その後の半十郎はどうなったか。小西家文書からはその様子を詳細に知ることができません。例えば次の【史料】がそのひとつです。この【史料】は廃藩からおよそ二年後の明治六年に、駿河国庵原郡岩淵村（現静岡県富士市岩淵）の斎藤億右衛門から佐々井半十郎へ宛てた拝借金証文です。

岩淵は東海道において富士川を渡

河するための拠点でした。富士川はしばしば増水し、その際に通行者は岩淵で水が引くのを待ちました。増水は数日に及ぶことがしばしばあり、こうした人々を泊めるための旅宿が栄えました。そのなかでも大名の宿所である本陣をつとめたのが斎藤億右衛門家でした。

【史料】（「拝借金証文之事」（小西家文書17））



一、 拝借金証文之事
金貳百両也 但シ

為質物

茶畑八反歩 字大平

但シ貳千四百株

茶畑貳反歩 字荅下松

五ヶ年賦
壹割割渡

但シ六百株

合反別壹町歩

右は無抛入用ニ差支、其段御願申入、茶畑書入金子隼ニ拝借仕候処実正二候、返済之義は年々制茶取扱候ニ付集東京静岡岡江差送り、一日貳間賣上、益全之内元利とも年割之通り返済若五ヶ年二而残金有之節は此御皆済可仕候、右為證拠物地券状御渡し次第差進置可申為後日證書如件

明治六四年

駿州庵原郡岩淵村

拝借 斎藤億右衛門（印）

同 證人 大村桜作（印）

佐々井半十郎様

明治六年（一八七三）、岩淵村の斎藤億右衛門が同村の大村桜作を証人として、佐々井半十郎から金二百両を拝借しました。返済期間は五年で、利率は一割でした。この担保としては、茶畑一町歩（茶木で換算すると三千株）が充てられました。返済方法を見ると、毎年製茶を東京の静岡園へ送り、その収益を返済に充てることが定められました。この静岡園とは何かというと、佐々井半十郎が明治五年から浅草橋で営んだ製茶問屋です。

つまり、形式としては拝借金ですが、実際には佐々井が金二百両を前

払いして発注をかけ、茶を仕入れるといった業務契約であったことがうかがえます。

また、小西家文書の別史料では、半十郎が静岡藩勸農掛時代の明治三年に、岩淵村の大村惣一郎へ「開墾方入用」として金二百両を貸し付けたことも確認できます（小西家11）。つまり、静岡藩時代から半十郎が農政官として岩淵村との関わりがあったことが分かります。

以上から、佐々井半十郎は廃藩以降も、静岡藩時代に農政官として構築した静岡の地方との人的ネットワークを活用しながら、東京で製茶問屋を営み、静岡の製茶産業の発展に貢献しつづけました。

その後の静岡園茶店がどうなったのかといえば、半十郎の跡を継いだ息子の治郎吉が明治二十二年に「焙茶乾機」の特許を獲得し（『帝国ニ

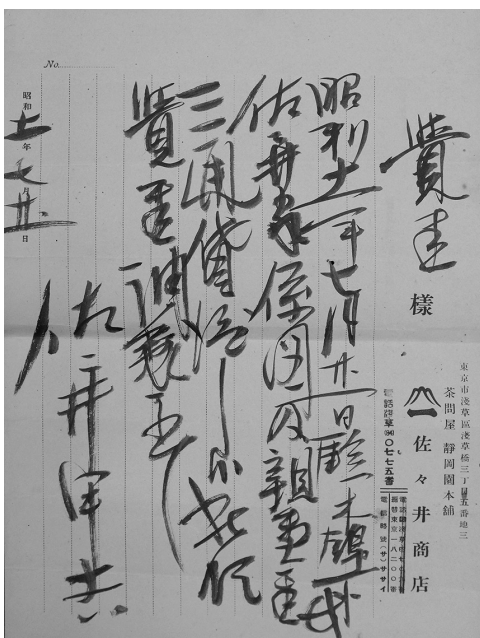
於ケル特許発達一斑』）、更なる発展を遂げます。そして孫の甲吉が大正七年に静岡園を合資会社佐々井商店とし、引き続き製茶問屋を軸として東京市内に六つの支店を構えるに至りました（『自治業界発達誌』）。

こうした明治以降の佐々井家の商業の原点には、幕府の代官として半十郎が培った農政に対する知識と経験があったものと考えられます。幕府の代官として培った経験が、明治時代以降の佐々井家を助けたのです。

（郷土博物館 専門員）

参考文献

・あさくらゆう「代官佐々井半十郎について」『足立史談』四八二・四九三・四九五・四九三号、二〇〇九。
・坂本達彦「佐々井久保」（村上直ほか編『徳川幕府全代官人名辞典』東京堂出版、二〇一五）。



茶問屋 静岡園本舗 佐々井商店の便箋（小西家文書20）
浅草橋三丁目五番地三

昭和11年（1936）7月21日
内容は、半十郎の孫である佐々井甲吉が、鈴木錦一郎（麹町の茶商）へ「佐々井家系図」など三通を貸し渡した際の証文である。